

第 69 回プロレス文化研究会レポート

「プロレスの隠れた顔」

2023.6.17 八文字屋

I 岡村正史「パリ発 日本マット界噂の真相 2000 年代編」

1 「プロレスの隠れた顔 リング、舞台裏、ビジネス」について

ウィキペディア（フランス語版）によると、フランスで出版された、フランスのプロレスに関する書物は今まで 7 冊存在する。1960 年代以降、レスラーによる本が 3 冊、大学関係者が 2 冊、記者が 1 冊、（フリー）ジャーナリストが 1 冊である。このうちジャーナリストの著作、クリスチャン・ルイ・エクリモン『プロレス、その黄金時代 1920～1975 年』 ”Catch, l'age d'or, 1920-75” の概要に関しては、拙著『「プロレス」という文化』（ミネルヴァ書房、2018 年）の第 1 章で紹介した通りである。

また、プロレス全般に関する著作は多数あるが、英語が大半を占め、フランス語は 2 冊にすぎない。そのうちの 1 冊がここに紹介するディミトリ・グルル、ウィトルド・ジャモフ「プロレスの隠れた顔 リング、舞台裏、ビジネス」La face cachee du catch Ring, Coulissee et Buisiness (Books on Demand GmbH, 2009) である。章立てを見ればわかるように、WWE、ECW、WCW など主としてアメリカの団体を取り扱っているが、日本のプロレスについての記述も散見される。ちなみに、フランスのプロレスに関しては皆無である。

本書は 18 か月以上の期間で収集された 1 万 1 千ページ以上に及ぶアーカイブに基づいて作成された。最初の原稿では 500 ページの書物になったそうだが、実際に出版された本は 192 ページであった。アメリカの団体の歴史などを系統的に描いてはいない。むしろ、小さなエピソードを集めたデータ集、いわば「小ネタ集」の様相を呈している。テーマはシナリオ、ギャラ、契約、裏切り、嫉妬、友情などプロレスの表裏にわたり多様である。

すっかりプロレスが衰弱したフランスから見た「プロレス先進国」のプロレスに関するデータ集の中から、日本関係、すなわち日本の団体、レスラーについてのデータ、来日外国人に関する小ネタをピックアップして紹介したい。玉石混淆のエピソードであり、明らかな誤りもあるが、「プロレス後進国」からは「先進国」はどう見えているかというデータとして寛容に享受いただきたい。

2 「プロレスの隠れた顔」の章立て

第1章 かつて複数のテリトリーがあった

第2章 最後の瞬間の変化：もう少しで見られたもの 第 1 部

第3章 すべてのジャンルでの失敗：プロレスがアドリブするとき

第4章 WWE のペイ・パー・ビューの購買者 1989～2000 年（データのみ）

第5章 プロレスにおける戦い：本当の頭部攻撃 第 1 部

第6章 ECW の誕生

第7章 サバイバー・シリーズ 1997 年：モントリオールのスクリュージョブ

第8章 さまざまな、だが、けっして傷んでいない小話 第 1 部

第9章 プロレスはへまをする 第 1 部

第10章 誰がすべてを決めたの

第11章 第 2 章の第 2 部

第12章 ECW のペイ・パー・ビューの購買者 1997～2000 年（データのみ）

第13章 WCW：エリック・ビショフは去り、ヴィンス・ルッソは船を降りた

- 第14章 第8章の第2部
- 第15章 彼らはわれわれのもとをあまりにも早く去った
- 第16章 第5章の第2部
- 第17章 WWEの1999年10月
- 第18章 第9章の第2部
- 第19章 1998年：WWEにおけるハルク・ホーガン？
- 第20章 第8章の第3部
- 第21章 2001年：WWEはWCWを活性化することを望んでいた
- 第22章 WCWのペイ・パー・ビューの購買者 1989～2001（データのみ）
- 第23章 知っておいて損はない
- 第24章 どの時期のTNAがどんなインパクトを残したのか
- 第25章 第5章の第3部
- 第26章 大群衆で埋まった興行（データのみ）

3.エピソード集

①「WWEのレスラーは俳優の契約をしていて、スポーツ選手の契約をしていない。スポーツ選手はその名前に付された諸権利を気にかけることなく競争の場に行くことができる。逆に、ドラマ「フレンズ」シリーズのマチュウ・ペリーは他のドラマ・シリーズで「チャンドラー」（彼の役名）として現れることはできないだろう。」

※マチュウ・ペリーは俳優。

※ウィル・オスプレイは「WWEのレスラーはアクター」と発言。

※ディーン・アンブローズ → ジョン・モクスリー

※サーシャ・バンクス → メルセデス・モネ

②「WCWが2001年1月29日「ナイトロ」の放送でスペル・クレイジーとタジリにテストマッチに出場するよう提案した。タジリは自分の力量を示すよう要求されているという事実によって馬鹿にされていると感じて拒否した。スペル・クレイジーは受け入れたが、結局最後の数分で落第した。」

※WCW 2001年3月解散

③「2001年2月26日、アントニオ猪木は記者会見でマイク・タイソンが新日本プロレスと署名したと発表した。猪木は同年6月東京ドームで小川直也と対戦すればタイソンに5万ドルを与えたことだろう。タイソンのマネージャーはすぐに否定した。」

※5万ドルは誤植か。

④「WWEの新しい「巨人」が1998年に鍛えているのを見た人々は今まで見たことのないもっとも堂々とした人物であることが重要であると断言した。2メートル16センチに達した彼をWWEはジャイアント・シルヴァの名前でオディティーズのグループにすばやく統合した。ガラス張りの数か月後、彼はWWEをやめ、新日本プロレスに合流した。とりわけジャイアント・シン（グレート・カリ）とタッグを組むのが見られた。」

※シルヴァが新日本に登場したのは2001年9月。

⑤「WCWの24人のレスラーがやってきたが、WWEの登録選手層は2001年ほど深くはなかった。WWEは当時多くのレスラーを競わせるために新日本と契約を結んでいたのである。」

※WWE（当時はWWF）は若手中心のWWE傘下のブランドとしてWCWを再構築しようとした。買収

後にWWEと契約したのは大半が若手・中堅。再構築をあきらめ、WWEの番組に選手を登場させるも、観客の反応は薄かった。旧WCWで目立った活躍はブッカー・Tのみ。WCW勢はフェードアウト。

⑥「舞台裏ではWWEの多くの幹部がECW側のレスラーおよびファンの多くの蛮行にショックを受けたと言われている。かれらは、ハマーシュタイン・ボールルームはプロレス興行を行った最悪の場所の一つだと断言している。ヴィンス・マクマホンは度を越した試合がいくつかあった（特に、田中将斗対マイク・オーサム）ことを見つけて、この種の雰囲気を予想していた。」

※田中対オーサムは2005年6月12日にニューヨークで開催されたECW ONE NIGHT STANDで実現。レスラーの間では「ECWらしさを表す最高の試合」か、「なぜここまでやるのか」と評価が分かれた。

⑦「相模原でシェーンのパートナーとして現れたチャイナは2002年9月13日新日本プロレスでデビューした。この非凡なタッグは後藤洋央紀、ヒロ斎藤と対戦した。ジョアニーという名前で、彼女はシェーンやジャスティン・マッカーリーとタッグを組んで獣神ライガー、蝶野正洋、田中将斗と戦った。それっぽっか。」

※後藤洋央紀は後藤達俊の間違い。田中将斗も誰かの間違い。

※ジョアニー・ローラーの初試合は9月6日、石川県産業展示館。

⑧「ハルク・ホーガンは2003年1月19日東京ドームでWorld-1のショーに出場するはずだった。計画では、ビル・ゴールドバーグとタッグマッチで対戦することになっていた。実際には、その代わりにゴールドバーグとグレート・ムタがブライアン・アダムスとブライアン・クラーク（元クロニック）と対戦した。」

※World-1はWrestle-1の間違い。

※グレート・ムタは武藤敬司の間違い。

⑨「姿を消す直前、ペリー・サターンは複数の側近に2003年に新日本のブッキングで参加し、さらには、ロサンゼルスの新日本道場のコーチになると打ち明けていただろう。」

※ペリー・サターンは2003年には2回新日本に来日。

2004年 強姦犯から女性を助けようとしたときに銃弾を浴びて重傷を負う。

2011年インディーで復帰。

⑩「つねに観客の反応を気にかけてきたWWEはRatingsの低下の結果として試合を修正するために各会場の座席の上に自由に処分できる質問票を2003年に作り上げた。この質問票は、観客にRawとSmackdownを比較し、平凡な、予見できない、家庭向けの、ユーモアのある、スポーツ的な、等々のような形容詞の助けを借りて、さまざまなショーを形容することを要求していた。それは観客に期待することについても問うていた。アクセントはストーリーラインの進展に置くべきか、あるいは厳密に言えばプロレスそのものに置くべきかどうか、もっとも小さいレスラーよりも肉体の怪物を好むかどうか、レジェンドと若手、どちらが動くのを見たいか、などである。」

⑪「「力道山」、日本のプロレス史上最大のスター、力道山の生涯を追った映画は彼の没後41年を記念して2004年12月15日に韓国で上映された。何十年にもわたって、日本と韓国におけるさまざまな対立のために、彼が朝鮮人であったという事実は民衆に周到深く隠されていた。」

※映画「力道山」（監督ソン・ヘソン）にはソル・ギョング、中谷美紀、萩原聖人、藤竜也らが出演。日本公開は2006年3月4日。「力道山OB会」はいっさい関与せず、百田光雄（当時ノア副社長）の協力のもと完成。1954～55年のエピソードをクローズアップし、1963年の出来事と直接結びつける構成になっている。日本上映時にエンディングで「史実を元に独自の解釈を加えて製作しており、事実と異なる

場合がある」というテロップが加わった。また、パンフレットの年表には力道山は「朝鮮半島出身と言われているが、定かではない」という記述があり、サウンドトラックCDにも「出生地については、現・北朝鮮にあるハンギョン県という説もあるが定かではない」とあり、百田サイドの意向が反映されていると考えられる。

⑫「日本のプロレスの大きな1ページが2005年2月に記述された。このとき小島聡が史上初の4冠王者になったのである。」

※2005年2月20日 小島聡が天山広吉に勝利(59分45秒)し、IWGP及び三冠王者となった。

⑬《エディ・ゲレロ(1967年10月9日～2005年11月13日)》

「2005年11月3日日曜日、エディ・ゲレロはホテルの自室で死亡した。朝早く、ガードマンが、エディが電話に応答しないと告げるためにチャボ・ゲレロを呼んだ。チャボも電話したが、無駄だった。彼はエディの部屋に急いで駆けつけたが、床で動かなくなっているエディを発見した。救急隊がすぐに到着したが、エディはすでに死んでいた。同夜、TNAのPPV、ジェネシスが行われた。エディ・ゲレロへのオマージュを表したプラカードが会場の至るところで見られた。地球の他の端では、ドイツのWXWで小橋建太とアレスの対戦を見に来ていた観客が彼の思い出にふけていた。エディ・ゲレロへのオマージュとなったスマックダウンは3.1%を獲得した。これは2005年9月9日に金曜日に移行して以来、最高の視聴率である。」

※WXWはドイツのルール地方を拠点とした団体。日本の団体と交流がある。

⑭ブロック・レスナーの起用に関して新日本でWWEに対して起こされた訴訟は、東京ドーム興行の前日である2006年1月3日に起こされた。ブロック・レスナーは結局ドーム興行に出場した。

※2005年10月8日IWGP戦 レスナー 対 藤田和之 対 蝶野正洋→レスナーが王者に。

11月14日 ユークスが新日本の株式51.5%取得。新日本を子会社化。

12月10日 1.4東京ドームのレスナー対藤田戦を藤田がキャンセル。→中邑真輔に変更。

2006年1月4日 レスナーが中邑を破る。

1月10日 新日本契約更改、11名離脱。

6月20日 藤波辞表提出、退社。

7月15日 レスナー来日中止、IWGP王座剥奪。

7月17日 棚橋弘至IWGP王者に。

Cf 2005年頃 ハッスルは隆盛を迎えていた(11月3日 和泉元彌 対 鈴木健想)。

⑮ 数々の試みの後、WWEは2006年にノアに一時的に移行していた2コールド・スコープと再契約した。彼はいかなるテレビショーにも参加しなかった。WWEの幹部に対して大いに主張したのはブッカーTであり、彼はWWEの幹部がECWの元スーパースターとサインすべきだと主張した。

⑯健介オフィスの主たる秘蔵っ子、中島勝彦は実際に佐々木健介とその妻北斗晶の養子である。

⑰ 2007年5月から、WWEは試合にリアリズムを加えるという目的で小さな体験を試みた。ハウスショーにおいて試合の結末に関してレフェリーに前もって告げないことにした。

ただし、双方のフィニッシュ技はもちろん伝えられている。

⑱「レッスルマニア24」の成功(2008年3月30日)の成功は始まりにすぎなかった。なぜならそれに続くヨーロッパツアーはアメリカ以外の前売り券興行で会場記録を打ち立てたからだ。20の興行のうち、15が前売り券興行だった。全体で、17万5千人のファンがスペイン、オーストリア、フランス、スイス、ポルトガル、イギリスでショーに駆けつけた。このツアーのチケット販売はWWEに1450万ドルをもたらした。

※レスルマニア 24（於オーランド）

フレアーがHBKに敗れ、涙の引退。／フロイド・メイウェザーはビッグショーに凶器パンチでKO勝ち。／アンダーテイカーがエッジを下し、世界ヘビー級王座獲得。

※パリで発行されたフリーペーパー「ア・ヌ」（2008年9月）はフランスにおけるWWEの成功を伝えている。

⑲おちぶれたスター・レスラーの役でミッキー・ロックを出演させた映画「レスラー」が公開されたとき、ジョン・ローリナティスはすぐにフロリダのバー、バーボンストリートナイトクラブでのFCWのショーを中止することを命じた。彼はWWEの試合があつた映画で示された惨めでひどく汚い雰囲気から最大限切り離されることを望んだ。

※映画「レスラー」（ダーレン・アロノフスキー監督。2008年。）。ヴェネツィア映画祭金獅子賞。ゴールデングローブ賞主演男優賞。全米興行収入最高位14位。

村松友視の評価「プロレスの虚実と人生の虚実を同時に描いた初の作品」

※ミッキー・ロック（1952～）俳優、ボクサー（ライトヘビー級）

⑳ 武藤敬司は2009年始めに新日本プロレスの幹部と会った。両団体はこの年を通じていっしょに仕事をする事で一致した。彼らは同じ日に同じ場所で興行を行わないために日程面で協力することにも同意した。

※2008年4月27日 武藤（全日本）が中邑を破りIWGP王者。

9月28日 ムタが諏訪魔を破り三冠王者。

2009年1月4日 棚橋が武藤を破りIWGP王者。

Cf 2008年ハッスルの衰退顕在化。

㉑ 潮崎豪は2009年始めにWWEサイドから契約を提示された。ノアはもし彼が、彼を待ち受けていた様々な試練（とりわけテレビ契約の終了）を乗り越えるのを助けるためにノアにとどまるならば、そのときはブッシュを約束した。

※2009年3月 日本テレビがノアの地上波放送打ち切り（関西では前年9月）。

6月13日 三沢光晴がリング上の事故で死去。

㉒ドラゴンゲートのスーパースター、CIMAは2009年4月に日本の組織（ドラゴンゲート）とROHのパートナーシップの解消を発表した。彼の言によると、ROHは2008年9月に日本で行われた2つの興行のときに日本のレスラーにギャラを支払わなかったようだ。ROHはすべてを否定し、今問題になっているレスラーすべてに支払ったと断言している。ROHによると、今回の分裂の原因は他にあるという。

※2009年4月15日 米国法人「DRAGONGATE USA」設立を発表。

㉓鷹木信悟は2009年の夏休み明けから豊富な髪をもう身につけていない。というのは法的心配から頭髪を剃らなければならなかったからである。多くのレスラーがリングで猿を虐待してドラゴンゲートで持ち上がった事件に連座して、彼は頭髪を剃るという侮辱に耐えねばならなかった。日本の文化では、頭髪を剃るというのは恥と同じである。

※兵庫県警が動物愛護法違反容疑で3名を書類送検。ニホンザルの雌「コラ」（推定10歳）の飼育を神戸市に届けていなかった。主犯は不明。

㉔ TNAと新日本の関係は2009年末より強化するかもしれない。高橋裕次郎と内藤哲也はIWGPジュニアタッグをめぐってモーターシティマシンガンズとライバル関係を始めるためにTNAに参加するという希望を持って英語の集中講座に参加している。

2010 年 1 月 4 日 NO LIMIT (高橋+内藤) が IWGP タッグ王者。

2011 年 5 月 NO LIMIT 解散。

2015 年 内藤、ロス・インゴベルナブレス結成。

※モーターシティマシンガンズ(クリス・セイビン、アレックス・シェリー)は両者ともデトロイト出身。

㊤ 棚橋弘至が 2010 年にノアのリングで戦うことを見るのは予想しうる。

《ノアのここ 10 数年》(by「別冊宝島」)

2008 年末 第一次リストラ(本田、菊地、泉田、川畑、橋、志賀、マイティ井上レフェリー)

2009 年 1 月 仲田龍(リングアナ)が「ノアタワー構想」発表

2009 年 3 月 日本テレビがノアの地上波放送打ち切り(放送権料 2 億円)。→BS へ移行。

6 月 13 日 三沢光晴がリング上の事故で死去。

2010 年 10 月 ノアの系列会社が神戸に飲食店「NOAH Z KOBE」オープン

2011 年 6 月 バス運転手(牧村氏)死去

2014 年 2 月 仲田龍氏の遺体、車中で発見

2016 年 11 月 エストビーに事業譲渡(三沢ノアの終焉)

2016 年 11 月 28 日 永源遙(営業担当)死去

2017 年 1 月 泉田純死去

2019 年 2 月 1 日 リデット・エンタテインメント(総合広告代理店)の子会社化

2020 年 9 月 1 日 サイバーエージェントの子会社化

II 岡村正史「プロレスラーの訃報研究」

一般紙は、新聞によって時期は異なるものの力道山時代のある時点からプロレスをスポーツ欄で報道しなくなった。しかし、テレビなどで知名度を得るレスラーは後を絶たないし、一般紙がそのすべてを無視しているわけではない。プロレスそのものを無視できたとしても。

「日本プロレス全史」2014 年版および訃報 wiki 2014 年～2022 年をベースにしてみると、1954 年以降プロレスラー及び関係者で逝去したおもな者は 360 名以上を数える。このうち、読売、朝日、毎日の三大紙すべてに訃報が掲載された者は選手 41 名、関係者 5 名の計 46 名である。以下に記す(逝去順)。なお、事故報道も訃報に含めている(三大紙東京版基準)。2023 年 5 月 31 日現在。

【選手】

1963 年 力道山

1973 年 東富士

1982 年 ハロルド・T・サカタ

1987 年 ハル菌田

1993 年 アンドレ・ザ・ジャイアント、木村政彦

1995 年 ミスター珍

1997 年 プラム麻里子

1998 年 ボボ・ブラジル、豊登

1999 年 芳の里、ジャイアント馬場、門恵美子、ジャッキー佐藤

2000 年 ジャンボ鶴田

2002 年 ルー・テーズ、サンダー杉山

2003年 吉村道明、フレッド・ブラッシー
2005年 橋本真也
2006年 大木金太郎
2007年 カール・ゴッチ
2008年 グレート草津、キラー・コワルスキー
2009年 三沢光晴、ショータ・チョチョシビリ
2010年 ラッシャー木村、アントン・ヘーシンク、山本小鉄、ジョー樋口
2011年 上田馬之助
2014年 ビル・ロビンソン
2015年 ビレム・ルスカ
2016年 ハヤブサ
2018年 ブルーノ・サンマルチノ、マサ斎藤、輪島大士
2019年 ザ・デストロイヤー、北尾光司
2020年 木村花
2022年 アントニオ猪木

【関係者】

1956年 新田新作
1990年 九州山
2003年 森下直人、小島貞二
2018年 馬場元子

次に、三大紙のうち二紙に訃報が掲載されたレスラー及び関係者を記す。

【選手】

1985年 佐藤真紀（読・毎）
1988年 ブルーザー・プロディ（朝・毎）
1997年 ジープ・スウェンソン（読・朝）※俳優「バットマン&ロビン」出演
2000年 福田雅一（読・朝）
2002年 ワフー・マクダニエル（読・毎）
2010年 星野勘太郎（朝・毎）
2015年 バーン・ガニア（朝・毎）、阿修羅原（朝・毎）
2018年 ビッグバン・ベイダー（読・毎）、ダイナマイト・キッド（読・毎）
2019年 青木篤志（読・毎）
2021年 ストロング小林（読・毎）

【関係者】

1956年 阿久津直義（読・毎）※リングアナウンサー

一紙のみに掲載された人々は以下の通り。

【選手】

1987年 マイク・フォン・エリック（朝）
1993年 直井敏光（読）

2004年 ヘラクレス・ヘルナンデス（読）
2005年 エディ・ゲレロ（朝）
2007年 クラッシャー・バンバン・ビガロ（朝）
2016年 永源遙（朝）
2017年 チャボ・ゲレロ（毎）
2019年 ハーリー・レイス（毎）※日経にも掲載
2020年 サムソン宮本（朝・「惜別」欄）※プロレス愛好者団体「新根室プロレス」代表

【関係者】

2002年 荒井昌一（朝）
2009年 松永高司（朝）
テッド・タナベ（朝）※レフェリー

最後に、訃報が三大紙に掲載されなかった主要レスラー・関係者は次の面々である（岡村の主観）。

1973年 グレート東郷
1985年 吉原功
1986年 山口利夫
1988年 マイク・シャープ
1991年 ディック・ザ・ブルーザー
1997年 フリッツ・フォン・エリック
1999年 ヒロ・マツダ、ゴリラ・モンスーン
2001年 ジョニー・バレンタイン、ベン・シャープ
2003年 ザ・シーク、ホーク・ウォリアー
2005年 クラッシャー・リソワスキー
2010年 ジャック・ブリスコ、ジン・キニスキー
2015年 ニック・ボックウィンクル
2018年 ドン・レオ・ジョナサン、ペドロ・モラレス
2020年 アニマル・ウォリアー、ダニー・ホッジ

ファンの思いと訃報を通しての「知名度」のギャップに皆さんはどういう思いを抱くでしょうか。
参考までに、一般紙のある調査結果を記します。

【参考】「記憶に残る昭和の外国人レスラー」（朝日新聞 2015年5月2日付）

回答者数 1378（対象 朝日新聞デジタル会員）あらかじめリストアップした 55 人から「もう一度見たいと思う」人名を複数選択。 ※回答数の後は訃報の掲載紙。

- ① アブドーラ・ザ・ブッチャー 694
- ② ザ・デストロイヤー 670 読・朝・毎 ※調査当時は存命。
- ③ スタン・ハンセン 411
- ④ ルー・テーズ 364 読・朝・毎
- ⑤ アンドレ・ザ・ジャイアント 327 読・朝・毎
- ⑥ ミル・マスカラス 310
- ⑦ ハルク・ホーガン 302

- ⑧ タイガー・ジェット・シン 270
- ⑨ ボボ・ブラジル 265 読・朝・毎
- ⑩ グレート東郷 202 掲載なし
- ⑪ シャープ兄弟 190 掲載なし
- ⑫ テリー・ファンク 153
- ⑬ ビル・ロビンソン 145 読・朝・毎
- ⑭ アントン・ヘーシンク 133 読・朝・毎
- ⑮ ドリー・ファンク・ジュニア 125
- ⑯ ブルーザー・プロディ 119 朝・毎
- ⑰ フレッド・ブラッシー 112 読・朝・毎
- ⑱ フリッツ・フォン・エリック 68 掲載なし
- ⑲ ダイナマイト・キッド 65 読・毎
- ⑳ ロード・ウォリアーズ 48 掲載なし
- ㉑位以下
- ハロルド坂田 読・朝・毎
- キラー・コワルスキー 読・朝・毎
- ブルーノ・サンマルチノ 読・朝・毎
- ブラック・タイガー（マーク・ロコ） 掲載なし
- ザ・シーク 掲載なし
- ジン・キニスキー 掲載なし
- ビッグバン・ベイダー 読・毎

死ほど平等なものはありません。人はいつか死を迎えるのです。そして、訃報に載ることを目標に人生を送るわけではありません。訃報はその人物の総決算書ではありません。

しかし、訃報を通して見えてくるものがあることも事実です。プロレスラーに関してのメディアの姿勢、リング上での活躍の度合いが必ずしも訃報に直結しないこと、死去のタイミング、現役引退から死去までの年数、タレント・俳優としての知名度、…

訃報の研究はまだ始まったばかりです。

Ⅲフリーディスカッション

【この本に関して】

○「プロレスの隠れた顔」の著者はどういう人物なのか。→よくわからない。→実在するのか。関係者などが変名で書いているケースがある。

○WWEがヨーロッパでブレイクしたのは2008年。この本の出版は2009年。増大したであろうプロレス愛好家を読者に想定したのか。

【エピソード集に関して】

① ○WWEで本名を名乗る中邑真輔は例外か。→鈴木健想はヒロヒトとして、華名はASUKAとして、宝生カイリはKAIRIとして、リングに上がっている。

○旧WWF（現WWE）は1999年株式上場に際して、事業内容を公開するに当たってシナリオの存在を公式に認めた。そして、同じ略称を有するWWF（世界自然保護基金）からの訴訟では2002年

に敗訴し、WWEと改名した。→1979年までのWWWFだったらWWF（世界自然保護基金）から訴えられることはなかったのではないかな。→WWWFからWideを取ってWWEになった。NWAからのクレームによる。→WWFがWWWFに戻るのではなく、WWEに改称したのはエンタテインメントにしようという意向が反映していた。

○オスプレイの「アクター」発言はWWE以外のレスラーが言いがちな一般論的発言だ。→インタビューの際に演出家がいるかどうかが重要な違いだ。

○新日本の鷹木信吾や高橋ヒロムはマイクアピールが売りになっている。後藤洋央紀やYOSHIHASIはしゃべれないのでタッグ王者止まりだ。→6月4日の大阪城ホールではSANADAが締めめのセリフの一部を失念し、周囲のレスラーに聞きまくっていた。が、誰も覚えていなかった。

○阪神タイガースのバースは本来は「バス」という発音だが、不調になったときにスポーツ紙に「阪神バス失速」と書かれるのを恐れて「バース」に落ち着いた。→1980年に起こった新宿西口バス放火事件に配慮したという話もある。→西武ライオンズのマッキノンはマキノンに、パリスンジェルマンのムバッペはエムバペになっている。

③の話は東スポに載った類のエピソードだろう。

⑦のジョアニー登場は猪木の強力な推薦によって実現した。

「それっぽっちか」は過小評価を嘆いているのだろう。当時、全日の会場では「新日も女をあげるようになったら終わりやな」という声が聞こえたし、新日の会場でも「タッグ選手権に女と年寄り（グレート・カブキ）が挑戦するようではあかん」という声があった。→時代は変わった。今女性を男性のリングにあげることに目くじら立てる人はいないのではないかな。→ウナギ・サヤカはスターダム所属でありながらフリー的な動きを見せている。→女性を出場させる、させない自体が商売になる。→国際プロレスを東京12チャンネルが放映したときに男女混合タッグ構想があったらしい。→国際プロレス女子部には内部だけでなく、新日本の星野勘太郎までやって来て強く反対したようだ。→朝日新聞編集委員の秋山訓子『小畑千代』には小畑千代対ムーラ戦の大成功が記述されているが、それが無料興行だったことには一言も触れていない。

⑩のようなアンケートは草間社長時代の新日本で実施されたことがある。もっとも、一般的な質問ばかりで「ストーリーライン」などに踏み込んだ設問は無理だ。

⑪○日本公開以前に新大久保のブラックマーケットで海賊版が売られていた。

○プロ文研の取材で制作会社が家に来たとき、ディレクターが「力道山を取材するとき二者択一を迫られる。ベルト、コスチュームなどを百田家から借りる場合出自の問題には触れられない。田中敬子さんなら触れられるが。」と語っていた。

○NHK「アナザーストーリーズ」では、力道山が新潟港に停泊した帰国船で娘と再会した話が紹介されていた。番組に出演していたイ・スニルの『もうひとりの力道山』では娘と弟に再会したことになっており、矛盾している。しかも、この話を裏付けるのが、力道山と同行した在日の経営者で、本人は亡くなっており、その息子の証言である。→あの番組は都合のいいところだけをつなぎあわせている印象がある。→朴一氏は娘の存在そのものを疑っている。→力道山は息子にも出自を明かさなかった。百田光雄は、父は日本人であるという立場を貫いている。長崎県に墓参りにも行っている。

○力道山がルー・テーズから奪取したインターナショナル選手権だが、テーズが保持した記録はない。

⑬は事実と反している。むしろ間違えた理由を知りたい。→「家族」同様の扱いをしていたということだろう。健介オフィスの長男坊という扱いだ。→DDTで健介と男色ディーノが対戦したとき、勝彦がセコンドの北斗に「ママ助けて」と叫んだことがある。

⑬の実験だとレフェリーだけが緊張を強いられることになり、あまり意味がない。どちらかのレスラーに結果を告げないことはありうるが。格闘技チックなプロレスならともかく、普通のプロレスは観客に満足感を与えるのが目的なので、流れるような攻防を見せるように努力する。

⑭○「レスラー」は日本では打ちあわせのシーンなどに観客は驚いたようだ。が、ジョン・ナイリティはそうではなく、プロレスの惨めなイメージとWWEが同一視されることを嫌った。

○ミッキー・ロークがかつての日本プロレスのレスラーのような体型になっていたのがリアルっぽかった。→ボクサーでもあるロークは最初プロレスを馬鹿にしていたが、撮影が進むにつれてリスペクトするようになっていった。

○劇中で使用されたガンズ&ローゼズの曲に感銘を受けたグレート・サスケは自身のテーマ曲に取り入れた。

⑮○内藤は渡米経験があるのか？→長州は自動車免許をとるためにメキシコに行った。そのためには3ヶ月必要だった。→長州が日本の教習所でおとなしくいる姿を想像できますか。

⑯○仲田、永源の死には謎が残る。

○永源の棺を担いだのはノアの選手ではなく、坂口、藤波ら新日本関係者だった。→馬場の密葬では「全日本生え抜きレスラーは隅の方に追いやられ、新日本出身者は中央で堂々としていた」と鶴田保子氏は自著に記している。→全日本、ノアのレスラーの体質はどういうものか。→馬場の葬儀では元子氏が主導権を握っていたはずだ。

【プロレスラーの訃報に関して】

○三大紙に載った中ではハヤブサに意外という気持ちがある。→障害者としての社会運動をしていたのか？→一般メディアへの露出、たとえば「24時間テレビ」などに出演していたか？

○同じ日に著名人の訃報が載ってレスラーがはずされることがあるのでは。

○ブルーノ・サンマルチノ、キラー・コワルスキーが三大紙に載って、ジン・キニスキー、フリッツ・フォン・エリックが載っていないのはどういうわけか。

○ニューヨーク・タイムズの記者にNWA幻想はなかったろう。→日本の一般紙の記者にもなかった。→いや、少しでもプロレスを知る記者にはあったと思う。

○ブロディーの場合、毎日社会面の扱いで、朝日は外信を短く伝え、読売はスルーした。

○ストロング小林は引退してからの時間があまりにも長く、2紙に留まった。

○練習生の権瓶広光が倒れたとき、大田区の現場で1日8000円のアルバイトをしていて、長州らのスパーリングを見られた。→今は練習時間になると、アルバイトは締め出される。

○訃報が載ることは少なくとも、プロレスネタが載ることはある。訃報ですら見向きもしないジャンルがあるのではないか。

○プロレスの認知度を調べるのに訃報はあまり意味がないのではないか。

○新聞はいまやオールドメディアだ。新聞の社会的地位の変化に注目すべきではないか。

○大学は新聞にこれだけ取り上げられていると文部科学省にアピールしかねない現状がある。

○渕正信は全日本からノアが独立した際、香山リカが新聞のコラムで全日本に留まった渕を絶賛していると知って、いたく感動したらしい。一般紙に自分の名前が掲載されて感激したのだろう。

○プロレス関係者で、ロラン・バルトの話をしている人はほとんどいない。